

「大学院の社会福祉学教育とグローバル・スタンダード」

日本社会事業大学 大橋 謙策

(はじめに)

- ・ 人類の歴史上、常に大きな課題であった「生老病死」、「鰥寡孤独」の問題を解決するために「社会の制度」として多様な方策を考えてきた。その方策は、当初未分化な救貧制度として始まるが、それは社会保険制度、社会手当、公的扶助、社会福祉と分化してきた。
- ・ 社会福祉は、他の一般施策と異なり、個人及び家族の生活技術能力・家政管理能力や養育力・介護力が脆弱になったか、喪失した際に、その人及び家族の自立生活を支援する営みとして必要とされるもので、金銭給付や現物給付という制度設計では問題解決出来ない対人援助を伴うところに特色があり、その営みである。
- ・ 岡村重夫が「社会関係の客体的側面だけに着目する一般的施策だけでは不充分であって、社会関係の主体的側面を問題とする個別化援助の方策がなければならない」(『社会福祉学(総論)』)と指摘した生活問題解決における一般的施策の整備と生活問題を抱える人の主体的側面との相互関係こそが重要——嶋田啓一郎先生の理論との関係。

I. 戦後社会福祉の展開における誤謬と新たな社会福祉システム・哲学

- ①戦前「社会事業」における積極的側面と消極的側面の継承と断絶
- ②労働経済学的救貧と余銭的給付
- ③憲法 25 条、89 条の桎梏と憲法 13 条の幸福追求権の位置
—1970 年「心身障害者対策基本法」第 25 条の理解と障害者福祉論—
- ④自由・平等の位置と「博愛」に関する理論の欠落—生涯学習論の原点—
- ⑤所得保障を軸にした「福祉国家」体制とボランティア主義涵養の欠落
- ⑥「地域における「新たな支え合い」を求めて—住民と行政の協働による新しい福祉—」
(2008 年 3 月)の報告書が意味するもの

II. 分析科学と設計科学の統合化と俯瞰型研究

- ①戦後社会福祉教育・研究における「社会運動的社会福祉研究」と「カウンセリング的ケースワーク」との乖離
- ②措置行政に基づく実践とソーシャルワーク実践との乖離
- ③既存学問体系への“劣等感”と実践仮説、介入プログラム、プログラム評価循環を考えた実践記録化の不備
- ④ソーシャルワークにおける「分析科学」と「設計科学」の統合化

- ⑤労働経済学・社会学の桎梏からの解放とヒューマンサービスにおける IPE 的俯瞰型研究

Ⅲ. 社会福祉系大学院におけるアドミッションポリシー

—エデュケーションポリシー、キャリアデザインの連環性と指導方法—

- ①学科目的的指導体制から共同研究体制に基づく指導法
—ティーチングアシスタント、リサーチアシスタント—
- ②人文科学、社会科学における「価値」に関する研究と自然科学における「実証」(再検・検証の可能性)研究との関わり
- ③指導教員のフィールドと院生のプログラム評価研究法修得の機会
- ④社会福祉思想・歴史研究の欠如と社会福祉学界における“角を矯めて牛を殺す”的サイクルの影響

Ⅳ. 「グローバル COE・グローバル 30 時代」における社会福祉系大学院の位置と課題

- ①大学院教育の 3 極化(高度専門職養成、資格養成校教員養成、専門多職化時代・グローバル時代における研究者養成)
- ②大学院教育・研究条件の整備—奨学金等
- ③連合大学院・連携大学院の可能性
- ④アジア型ソーシャルワークのグローバル・スタンダード構築の動向